

ドイツ語 = 日本語二言語による e-Tandem 学習プロジェクト

中川慎二（ドイツ語共同研究主任研究員）

0 はじめに

関西学院大学におけるドイツ語学習者とボーフム大学における日本語学習者との組み合わせで e-mail によるドイツ語 = 日本語タンデム学習のプロジェクトを 2012 年度春学期と秋学期にそれぞれ実施した。このプロジェクト学習の概要を報告するとともに、1 ペアの最初のメールのやり取りの談話分析を通して見えてくるコミュニケーション上の問題を指摘しておきたい。ただし、このプロジェクトは基本的に学習者にとっての学習プログラムであるので、研究のためにデータ収集を行ったのは副次的である。従って、参加者の募集に関しても条件の統制などは行っていない。関西学院大学言語教育研究センター・ドイツ語共同研究の枠組みで実施した。

e-Mail によるタンデム学習に関しては、現在は授業の枠組みでの取り組みは行っていない。かつてデュッセルドルフ大学の e-Tandem プロジェクトに、デュースブルクでの夏期大学に参加した数名の学生がパートナーとして登録した経緯があるが、タンデム学習をサポートする体制がなかったために記録は残っていない。

本学協定校のルール大学（ドイツ Bochum 市、ボーフム大学とも呼ばれる）、東アジア研究学部で日本語教育を担当しておられる半田講師からの申し出により、関西学院大学側では筆者が協力することになった。2012 年度 4 月にプロジェクトを開始し、春学期 6 週間、秋学期 8 週間の学習プログラムとして定期試験等に支障のない時期の実施とした。期間の設定が違うだけで、学期毎のプログラムの内容はほぼ同じである。学習プログラムではあるが、授業時間外の自由参加のパイロット・プロジェクトとして実施し、言語学習者のポートフォリオ開発も同時に合わせて行った¹。

1 タンデム学習と接触場面

Müller-Hartmann (2000) によると「タンデム自転車²の外国語学習を組織する方法の

1 関西学院大学特定プロジェクトセンター「言語学習者のためのポートフォリオ研究開発センター」との共同で行った。

2 2人以上が同時に乗ることのできる自転車のことで、2人乗り自転車は比較的知られている。その

一つで、その方法によって少なくとも2つの異なる母語の話し手はお互いの言語や文化を相互的に学び、ある程度教えるようにする。個別あるいはグループでのタンデムは、部分的に自律的な学習の文脈を構成するが、それはたいていは2国間の対面あるいはバーチャルな出会いとして組織される」(p.595)と説明され、外国語教育ではコミュニケーション・アプローチ(教室内での相互学習)から異文化間能力(Byram 1997, 中川2010)を統合した外国語学習へと発展させた結果であると説明され、母語話者やその文化との接触を増やすことにつながっているとされる³。タンデム学習は1970年代にはドイツ語=フランス語タンデム学習が2か国の休暇中の青少年交流プログラムとして実施されている。また、タンデム学習のコンセプトについては19世紀のチューター制度⁴(イギリスの大学では、学習者同士のタンデム、学習者と教授者とのチューターなども現在まで実施されている)に遡ることができるという。

さて、タンデム学習では学習者がそのパートナーと共に「自律的」に「相互学習」を構成していくところが特徴である。e-Mailによるタンデムの場合、インターネットというコミュニケーションのチャンネルを利用し、タンデム・パートナーとは相互に母語と外国語を使用しているのである。

今回のe-Tandemプロジェクトでは、学習者はパートナーの学習言語の母語話者としてその言語を使用していることと、プログラムの中で設定された課題に関しては、パートナーの提出した課題の言語使用に可能な訂正行為⁵を行っていることが、接触場面⁶における規範形成にどのような影響を与えているのかを考察することが重要である。これ

イメージに基づいて命名されているという意味である。一人乗りの倍以上の力が出力されると倍以上の高速で走行できるとされる。したがって、マイナスの相乗効果が出る場合も想定しなければならない。

- 3 筆者は、タンデム学習の場合は、母語話者の言語行動が規範となるとは必ずしも考えておらず、二言語使用というタンデム学習の条件と、それぞれの学習者がそれぞれの言語文化の空間のなかでヴァーチャルに異文化接触しながら異文化間能力を習得していくプロセスであると考えている。
- 4 小野(2002)参照。
- 5 この訂正行為に関しては、基本的に異文化接触場面での二言語使用であるので、言語管理の観点から指摘できる現象が見られた。母語話者の母語使用に関しては、非母語話者に影響を与えやすいのではないかと理論的には想定できる。また、メールのやり取りでは、後述するように、一定のテーマに沿って文章を書いた場合に、10か所までの訂正を行い返信することを課題としたので、その部分の訂正行為は、コミュニケーション上発生した言語管理とは性質の違うものであるが、これらの影響も考察できる。
- 6 ネウストプニー, J.V. (1995)『新しい日本語教育のために』の第8章にはネウストプニーが当時考えていた接触場面を言語管理の視点から研究する方法がまとめられているが、ネウストプニーは『外国人とのコミュニケーション』(1982)の中でもすでに言語管理のプロセスの原型を二章「外国人はどう行動するか」で示しており、それが「外来のラベル」である。

は従来の言語学的な考察では言語規範が母語話者の側に確保されている場合が多く⁷、ファーガソンの外国人話法 (foreigner talk) の議論をはじめとして、接触場面での言語行動が母語話者の母語規範から評価されがちである。しかし、今回の e-Tandem 学習では基本的に母語と外国語の二言語を使用しているために、そのような face-to-face で母語話者と非母語話者の間のコミュニケーション場面で生じるのとは違った形で均衡的な規範が構成されるのではないかと期待できる。これが、異文化間能力として習得されると、タンデム学習としては大きな成果となるが、その均衡へと向かうプロセスが繰り返される必要があると、これは6週間という短い期間で簡単には達成されないものである。

しかし、今回の e-Tandem 学習では、学習者がそれぞれのパートナーの学習目標言語の母語話者としてその言語を使用していることと、設定された課題に対しては可能な訂正行為を行うことが求められていることで、言語管理理論における「否定的に評価された逸脱」(加藤 2011)における規範が母語話者の母語規範になってしまう危険がある。

また、タンデム学習と教室での外国語学習との違いは、そのセッティング(言語使用の環境、条件、文脈)にある。教室内コミュニケーションは当該言語が使用される社会や文化とは違う形で構成された学習場面であり、ある意味では「自然」ではあるものの、基本的には「人為的」につくられた空間である。教室内コミュニケーションとは違って、e-Tandem のコミュニケーションは、その参加者がそれぞれ母語(ないし第1言語)と外国語(学習言語、パートナー言語)を使用することで、コミュニケーションそのものは authentisch(真正)なものであると言えるが、二言語使用のルールによって教授者(訂正行為を行う母語話者)と学習者(非母語話者)という権力関係がそれぞれ二重に発生すると予想される。

2 e-Mail によるタンデムの言語

Koch/Oesterreicher (1994) は言語メディアとそのメディア性について議論している。ここでは、Dürscheid (2003) により、Koch/Oesterreicher の議論を簡略に示すことで、e-Mail によるタンデム学習プロジェクトでの言語使用の特性について総括し、今回のタンデム・プロジェクトで収集した言語データの分析の可能性を示しておきたい。

Koch/Oesterreicher の議論は、現在のメディア・コミュニケーションを総括する議論ではないが、言語メディアとメディア言語の問題を整理するうえで有用である。

7 『ヨーロッパ言語共通参照枠』(2001)では、言語学習のモデルに理想的母語話者を立てずに、非母語話者の言語権を積極的に評価しようとしている。(中川 2013)

Koch/Oesterreicher は、言語の「はなしことば性」(Mündlichkeit) と「文字性」(Schriftlichkeit) に着目し、そのそれぞれに「メディア的な」(medial) と「概念的な」(konzeptionell) という分析上の尺度を援用し二つの志向性として分類した。メディア的な次元は音声や文字を通して実現された発話/言説 (Äußerung) の表出に関する次元であり、概念的な次元は筆致 (Duktus)、つまり発話/言説 (Äußerung) で選択された表現方法に関わるとされる。「メディア的な」「はなしことば性」と「文字性」は2つに分かれるが、「概念的な」「はなしことば性」と「文字性」は連続体をなし、その両極に「はなしことば」の極と「文字」の極が位置していると理解する。それを、それぞれの近さ (近さの言語)、遠さ (遠さの言語) という連想で置き換え、例えば家族の会話は、自己紹介のスピーチよりも「はなしことば性」に近いと説明するのである。コミュニケーションの空間的な近さ、コミュニケーションの参加者の親密性、コミュニケーションというイベントの「私人性」(Privatheit) あるいは「公共性」(Öffentlichkeit)、コミュニケーションの条件などかそれに加わる目印である。Dürscheid (2003) はそれに加えて、Holly (1997) により、テキスト外的な特徴をあげ、独話的 (mologisch)、対話的 (dialogisch)、同時的 (synchron)、非同時的 (asynchron) などをあげている。

e-Mail によるタンデムはどのような言語使用であると考えればいいのか。コミュニケーションのメディアはネットに接続した PC あるいはスマートフォンのような携帯電話である。そして、e-Mail がコミュニケーションの形態である。そのことを考えるために、具体的に一つのペア (12S-NaPo) から最初のメールのやり取りを考察する。

M1 の行数と M2 の行数は、それぞれの言語で書かれた内容が同一だと理解できるように整理した。M3 と M4 も 2 言語での返信をその書かれた内容についてほぼ同一だと考えられるものに整理し、同じ行数を与えている。

N: Nakata, Shinji 中田伸治 (仮名) P: Popper, Damian (仮名)

M1 (メール1 : Nakata が Popper に宛てたドイツ語メール)

Se	Sa	Z	Se: Sprecher(話者:書き手); Sa: Sprache(言語); Z:Zeile (行)
N	D	1	Guten Tag! Ich bin Shinji NAKATA. Freut mich !
N	D	2	Ich bin Student der Kwansei Gakuin University im zwei Studienjahr.
N	D	3	Mein Deutsch ist noch nicht gut, aber ich möchte besser werden.
N	D	4	An der Universität studiere ich das Gesetz.
N	D	5	Mein Hobby ist Futsal und Kochen.
N	D	6	Einmal in der Woche, habe ich Futsal spielen.
N	D	7	Ich höre hiphop bereitwillig vor kurzem.
N	D	8	Können Sie mir sagen die Künstler der Empfehlungen?
N	D	9	Genießen wir einen Tandem-Lernen.

M2 (メール2 : 中田がポッパーに宛てた日本語メール)

N	J	1	こんにちは！私は中田伸治です。はじめまして！
N	J	2	私は関西学院大学の二回生です。
N	J	3	まだ私はドイツ語が上手ではありませんが、上手になりたいです。
N	J	4	大学で、私は法律の勉強をしています。
N	J	5	私の趣味はフットサルや料理をすることです。
N	J	6	週に一度、私はフットサルをしています。
N	J	7	私は最近好んでHIPHOP を聞いています。
N	J	8	おすすめのアーティストを教えてくださいませんか？
N	J	9	タンデム学習を楽しみましょう。

M3 (メール3 : ポッパーが中田に宛てた日本語メール)

P	J	1	今日は中田さん！
P	J	2	私はダミアン・ポッパーです。どうぞよろしくお願いします。
P	J	3	ホルトハウゼンと言うの小さな町に住んでいますが、ルール大学で化学と日本語学を勉強しています。
P	J	4	今は二年生です。日本語はあまり上手ではない場合でも、いつか先生になろうと思います。
P	J	5	趣味は料理をすることと劇を演じるのことで、中田さんのように週間で一度芝居の稽古があります。
P	J	6	スポーツはあまりしないが、フットサルはどんなスポーツだ教えてください。
P	J	7	音楽について全部のを聞いています。ドイツのHIPHOP 縁者を教えてくださいませんか。
P	J	8	私は Clueso と Peter Fox は大好きです。でも今は Clueso は多くのポップミュージックをします。
P	J	9	Youtube では多くのビデオがあるから、ぜひみてください。
P	J	10	下に写真があります。タンデムは楽しみましょう！

M4 (メール4: Popper が Nakata に宛てたドイツ語メール)

P	D	1	Hallo Shinji Nakata!
P	D	2	Ich bin Damian Popper, Dein Tandempartner. Freut mich, Dich kennenzulernen!
P	D	3	Ich wohne in einer kleinen Stadt namens Holthausen, studiere aber an der Ruhr-Universität Bochum Chemie und Japanisch.
P	D	4	Ich hoffe, irgendwann einmal Lehrer zu werden.
P	D	5	Meine Hobbys sind ebenfalls kochen und Theater spielen. Ähnlich wie Du habe ich einmal in der Woche Theaterprobe.
P	D	6	Ich mache nicht sehr viel Sport, aber bitte erkläre mir in Deiner nächsten E-Mail, was Futsal ist!
P	D	7	Was Musik angeht, so höre ich im Grunde genommen alles, ich habe keine bestimmten Vorlieben.
P	D	8	Meine Lieblingskünstler des deutschen Hip-Hop sind Peter Fox und Clueso, auch wenn Clueso heute mehr Pop-Musik macht.
P	D	9	Auf Youtube gibt es viele Videos von den beiden, also sieh sie Dir bitte mal an!
P	D	10	Ich habe unten noch ein Foto von mir angefügt, damit Du siehst, wie ich aussehe.
P	D	11	Ich hoffe, dass wir beide an dem Tandemprojekt Spaß haben werden!

M1 は中田がポッパーに宛ててドイツ語で書いたメールである。初対面の人に対して口頭で使う挨拶の言葉で始まっている。はなしことば性の強い文字化された言語使用であるが、チャットのような疑似同期性は技術的に不可能である。M1 + M2 (2012/5/26) に対して3日間という時間的な遅れを伴いながら返信された(2012/5/29)メールがM3 + M4である。M1のドイツ語とM4のドイツ語を比較すると、M1には1人称単数の表現が11回、2人称は1回、1人称複数も1回だけ現れている。これは、M2の日本語メールでも同様で、1人称は7回、2人称は0回であり、M1 + M2のメール本文中での読み手ポッパーとの関係でいうと、最後に「おすすめのアーティストを教えてくださいませんか? タンデムを楽しみましょう。」(Z.9)のところでようやく成員カテゴリーが書き手のみの1人称から2人称、書き手と読み手を含めた1人称複数となっている。他方、M4ではM1とは違って、書き手の1人称(12回)と読み手の2人称(7回)が多用されている。

ただし、M1 + M2はメールの本文で書かれているのだが、M3 + M4は添付のワードファイルになっており、ポッパーはメールの本文にも二言語で以下のように書いている。

M 5 : ポッパーが M1 + M2 への返信を出した時のメール本文で、M3 + M4 はこのメールの添付ファイルの形で送信された。(空行は行数には数えていないが、原文のまま残した。)

Se	Sa	Z	M5(メール5: Popper が 中田に宛てた最初のメールの本文)
P	J	1	今日は中田さん!
P	J	2	私はダミアン・ポッパーと言うの中田さんのテンドムパートナーです。
P	J	3	はじめまして!
P	J	4	正しいメールは t 添付ファイルであります。
P	J	5	でも、質問があります。
P	J	6	1) 添削があれば、いつも次のメールの始まりにしましょうか。
P	J	7	2) 先生は S k y p e で自己紹介をした方がいいだと言いました。中田さんのニック・ネームは何ですか。
P	J	8	私のは samuikuni です。
P	J	9	じゃ、次のメールで!
P	J	10	ダミアンより
P	D	1	Hallo Nakata-san!
P	D	2	Ich bin Damian, Dein Tandempartner.
P	D	3	Guten Tag!
P	J	4	Die "richtige" E-Mail befindet sich im Anhang.
P	D	5	Ich habe noch zwei Fragen:
P	D	6	1) Wenn wir Korrekturen für den anderen haben, sollen wir diese dann immer am Anfang der nächsten E-Mail schreiben?
P	D	7	2) Meine Dozentin sagte, dass sich die Tandempartner per Skype vorstellen sollen. Wie lautet dein Nickname?
P	D	8	Meiner ist "samuikuni".
P	D	9	Ich freue mich auf Deine nächste E-Mail!
P	D	10	Damian

とあり、実際には最初の M1 + M2 への返信とは別に、挨拶、自己紹介、添付ファイルに返信があること、そして質問として 1) メールのやり取りに関する手順の提案があり、2) ニックネームを尋ねる前に、このメールのやり取りに関しては、さらにタンデム学習を指導している教員という別の審級があることを記述し、Skype でのやり取りを半ば提案している。したがって、言語表現としては質問の形をとっているが、語用論的には手順の提案と Skype 使用の提案をしている。また、概念的にはドイツ語の部分で 2 人称親称が多用されていることと、ニックネームを持ち出すことで、Koch/Oesterreicher のいう近さの言語に分類されるような(言語行動というよりは)むしろコミュニケーション行動になっていると言える。しかも、このメール本文 (M5) は、添付ファイルとの関係ではメタレベルの言語使用になっており、中田からのメール M1 + M2 の中にある Guten Tag (N-D-1) の隣接ペアがこのメール本文 (M5) Guten Tag! (P-D-3) に見られ、M1 + M2 は M3 + M4 とは一部で隣接対になっているものの、ほとんどは内容的な照応関係にある。M1 の N-D-8 と M2 の N-J-8 とは、M3 の P-J-7~8 と M4 の P-D-7~8 とが隣接ペアの役割を担っている。

Face-to-Face のコミュニケーションであれば、初対面にあたるメールで、同時に進行するので、話者交代が頻繁に起こるが、メールのやり取りであるので、書き手交代は時間差を持って生じるのみである。それにもかかわらず、M1 + M2 と M3 + M4 の内容的な照応関係は、仮想的な隣接ペアの役割を果たしていると言える。

ドイツ語非母語話者 Nakata の M1 の最初 Guten Tag! (N-D-1) の隣接ペアは、形式的には Hallo (P-D-1) である。ドイツ語非母語話者である中田がドイツ語初級学習者として最初に学習した挨拶表現が Guten Tag である。一方、ドイツ語母語話者である Popper が電子メールの最初に書いたのは Hallo Shinji Nakata! (P-D-1) である。ここには、最もドイツ語母語話者が電子メールの書き出しで普通に使用する語りかけ (Anrede) の形式が見られる。ところが、それにもかかわらず、フルネームを使用している。M4 のメールでは Popper は基本的に 2 人称親称を中田に対して使用しており、おそらくメールの最初も Hallo Shinji であればより自然なのであろう。また、日本語のメールを見ると、M2 では「こんにちは！私は中田伸治です。」(N-J-1) とフルネームを自ら使用し、丁寧な文体になっている。Popper からの日本語返信では、M3 「今日は中田さん！」(P-J-1) と相手の姓を使用している。M3 + M4 に対してメタ・レベルの記述の役割を担うのが M5 であり、M3 + M4 が添付されたメールの本文である。このメール (M5) では「今日は中田さん！」(P-J-1) と相手の姓のみをメールの冒頭の呼びかけで使用し

ている。ところが、そのメールの最後には、「ダミアンより」(P-J-10)とあり、自分の名(ファーストネーム)で終わっている。M5のドイツ語の部分では、相手に対して二人称親称を使用し、メールの最後にはDamianと自分の名(ファーストネーム)を記している。このように、ドイツ語母語話者同士のドイツ語による会話・メール・チャットなどでの言語使用の際の言語規範からはおよそ逸脱といえるような現象が入り込んでいる。つまり、親しい間柄での言語使用とより改まった場面での言語使用の混在が、ドイツ語の部分(M4. M5)とM5の日本語の部分にも確認できるのである。これは、Popperから中田へ宛てた最初の返信で現れた接触場面での逸脱現象であり、それぞれの言語規範からわざわざ離れている程度である。Popperが中田から届いた最初のメールへの返信で、中田のメールのスタイル(姓の使用による改まった感じ)に合わせつつ、「こんにちは中田さん!」(P-J-1)で相手の姓の使用(改まった言語使用)でメールを始めて、相手との関係では二人称親称を使用し、自分の名前を記すところでは名(ファーストネーム:親しい間柄での言語使用)を使用しているのである。

3 今後の研究の展開

メールによるタンデム学習プロジェクトでの言語使用の特徴を記述しつつ、二言語使用という条件のもとで、非同期の言語使用が、相互に母語話者と非母語話者というペアの間で行われる学習のプロセスを1つのペアの最初のやり取りに考察した。今後は、このようなペアごとのコミュニケーションとメール言語、メール・タンデム言語の特性が学習プロセスをどのように特徴づけているのか、また相互に進展する言語管理のプロセスを異文化間能力の習得という視点から考察し、分析結果を積み重ねていく予定である。今後は、2012年3月と7月に学会で成果の発表を行う予定である。

文献:

- 小野博(研究代表者)(2002)「大学の入学者選抜方式の改善」と「大学生の基礎学力の保持・大学教員のFD」平成11-13年度科学研究費報告書 基盤研究(A)(2)課題番号 国11691046 米国の大学入学後の教育選抜システムに関する研究—大学の進級選抜、進学配置、転入学システムの実践的研究—。メディア教育開発センター。
- 加藤好崇(2011)『異文化接触場面のインターアクション』東海大学出版会。
- 中川慎二(2013)「複言語主義」の項。『異文化コミュニケーション事典』春風社。
- 中川慎二(2006)「言語学習カリキュラムにおける相互作用」の意義をめぐって—ドイツ

- 語インテンシブ・コースにおける授業分析―『言語教育研究センター研究年報』第9号. 関西学院大学言語教育研究センター .
- 中川慎二 (2010) 「言語学習者のためのポートフォリオ」と自律学習:ヨーロッパ言語共通参照枠をめぐる. 『言語と文化』第13号. 関西学院大学言語教育研究センター .
- ネウストブニー, J.V. (1986) 『外国人とのコミュニケーション』岩波新書 .
- ネウストブニー, J.V. (1995) 『新しい日本語教育のために』大修館書店 .
- ネウストブニー, J.V. (1997) 「言語管理とコミュニティ言語の諸問題」『多言語・多文化コミュニティのための言語管理 - 差異を生きる個人とコミュニティ-』国立国語研究所, 凡人社 .
- Brammerts, Helmut / Kleppin, Karin (hrsg.) (2010) Selbstgesteuertes Sprachenlernen im Tandem. Ein Handbuch 3. Auflage. Stauffenburg Verlag Brigitte Narr GmbH, Tübingen.
- Byram, Michael (1997) Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence. Clevedon, Multilingual Matters.
- Dürscheid, Christa (2003) Medienkommunikation im Kontinuum von Mündlichkeit und Schriftlichkeit. Theoretische und empirische Probleme. Zeitschrift für Angewandte Linguistik 2011 Heft 55. Gesellschaft für Angewandte Linguistik.
- Koch, P./ Oesterreicher, W. (1985) Sprache der Nähe - Sprache der Distanz. Mündlichkeit und Schriftlichkeit im Spannungsfeld von Sprachtheorie und Sprachgeschichte. In Romanisches Jahrbuch 36. 15-43.
- Müller-Hartmann, Andreas (2000) Tandem learning. in Byram, M. (ed.) Routledge Encyclopedia of Language Teaching and Learning. Routledge, London and New York.